

陸自駐屯地紹介シリーズ 第49回

精強を今に伝えて 別府駐屯地

第41普通科連隊他

駐屯地シリーズ編纂委員会

はじめに

大分県には別府駐屯地、南別府駐屯地、湯布院駐屯地、玖珠駐屯地、及び大分分屯地がある。今回別府駐屯地を取材対象に選んだ理由は全く偶然で、地域的に次は九州と、駐屯地をリストアップして取材の打診を最初に電話したのが別府であったが「その時期は駐屯地司令が着任して間もないので、部外挨拶等で不在かも知れないが取材には応じられる」との回答を頂き、それは却って良い機会と喜んでお願いした次第である。

大分郷土部隊

と考えて取材しているが、6月号に金沢第14普通科連隊長の離任式を掲載した。今回、着任直後の連隊長兼ねて駐屯地司令の様子もまた題材となるのではないかと考えた。

大分県郷土部隊については、二つの連隊について述べなければならぬ。その一つ歩兵第72連隊は日露戦争直後に第12師団隷下として大分市に創設された。軍旗拝受は明治41年5月8日、大正8年シベリア出兵に際し、偵察派遣の香田小隊50名は約1千名の敵と遭遇交戦して全滅、次いで急遽派遣された田中大隊は5千名の敵と交戦し玉砕する悲劇があった。主力として到着した連隊の2コ中隊が大隊を全滅させた敵の内約2千名と交戦してこれを撃退した。この後連隊は各地を転戦し、8月に引き揚げ命令を受けて内地に帰還したが、軍縮で大正14年5月、歩兵第72連隊は軍旗奉還の後廃止、移駐してきた歩兵第47連隊に併合された。

現在大分県護国神社には歩兵第47連隊の鎮魂碑が立てられている。なおこの兵営は大分市駄原にあった。現在西大分駅の辺りで、今は自衛隊施設はない。

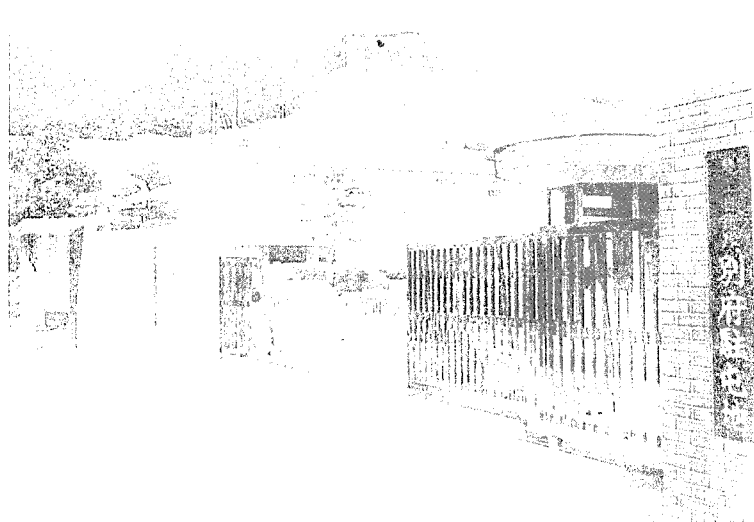
別府市

昭和32年に大分県別府市に自衛隊施設が創設された。別府市は湾の奥部、南北に走る海岸線と西側の由布岳、鶴見岳に挟まれた地域に広がり、温泉湧出量日量13万7千キロリットル、源泉数約2千800箇所、毎年観光客1千

歩兵第47連隊は明治37年3月に小倉に創設された部隊である。日露戦役で鳴緑江作戦、遼陽作戦、奉天会戦に参加し、シベリア出兵では歩兵第72連隊と共同して作戦している。

大分の郷土部隊となつてからは満洲事変勃発で昭和7年に動員下令、熱河作戦に始まり河北省にまで進出する奮戦を続け第6師団の勇猛の名を轟かせた。支那事変では杭州湾上陸、武漢三鎮攻略、大東亜戦争ではフィリピン作戦など転戦し、終戦をチモール島で迎えている。

万人を誇る全国屈指の温泉都市である。終戦前陸軍病院があった地域（現在別府公園がある大字野口原）に戦後米軍が進駐して来たが、そこへ昭和32年12月第3特科群が久留米市から移駐して駐屯地が開設された。昭和31年8月には第3教育団本部、第111教育大隊設置、37年8月第41普通科連隊編成完結、44年7月第3教育団本部は相浦へ移駐、52年4月第3特科群湯布院へ移駐



扇山麓にある別府駐屯地

があり53年8月旧駐屯地野口原から新駐屯地扇山へ移駐、平成11年3月第11教育大隊廃止、15年4月第4後方支援連隊第2整備大隊第3普通科直接支援隊新編の経過で現在に至っている。

別府駐屯地へのアクセス

羽田から約1時間半で大分空港に着く。空港は大分市ではなく国東半島杵築市の海岸にある。有り難いことに部隊から車で迎えに来て頂いており、丘陵の続く中を大分空港道路、日出バイパス、大分自動車道を走り継ぎ別府市に近づく。温泉地の景観があった。周囲の高台にはホテルらしい大きな建物、平地には古くからの造りの温泉旅館が散見され、所々には蒸気が噴き出し、微かな、時には強い硫黄の臭いを漂わせている。大分自動車道別府インターを出て、坂道を登るとそこはもう駐屯地の入り口であった。

別府駐屯地

風格のある焦げ茶色の正門の左手奥に正門と対照的な白色に屋上に国旗掲揚塔のある3階建ての建物があり、さらにその奥を眺めると左斜面に林、右斜面に草地の緑が映えていた。正門から直進する道路の左手斜面を削って隊舎、食堂、教場、体育館、整備工場などが並んでいる。此処に駐屯する部隊を紹介しよう。この駐屯地司令は第11普通科連隊長が兼務している。

第41普通科連隊

福岡県春日市の福岡駐屯地に所在する陸上自衛隊第4師団に隷属する4コ普通科連隊の一つであり連隊長は藤岡登志樹1等陸佐陸自87で、7月21日付で着任したばかりであり、前職は陸上幕僚監部の班長で、即日移動で着任式が実施された。着任式の執行官は着任連隊長自身で立会官は福岡駐屯地から来隊した第4師団長宮下寿広陸将陸自78であった。この時期の師団長は部下部隊長の離着任式立会のため管内各駐屯地を廻らなければならない。

式次第を紹介したい。第11普通科連隊副連隊長加来仁信2等陸佐指揮する連隊が参列部隊として整列し、駐屯各部隊隊長が陪列し連隊長は壇の横に待機する。師団長式場到着を受けて連隊第1科長の司会で、まず第1科長の「閉式の辞」ついで師団長が登壇し「師団長に栄誉礼(捧げ銃)」ついで連隊長が登壇して師団長の左に位置し師団長は「着任連隊長紹介」をする。ついで連隊長は降壇し「師団長に栄誉礼」、終わると師団長は退場する。これを連隊長は敬礼して見送り再び登壇し「連隊長に敬礼(かしら中)」その後副連隊長の先導で巡閲、終わると連隊長登壇して「着任の辞」、終わると「連隊長に敬礼」の後連隊長降壇、第1科長の「閉式の辞」で着任式は終

わった。この日は荒天のため屋内で行われたが、通常はこの後観閲行進が実施される。

この時の着任の辞は重要である。連隊長として一部隊の使命完遂に責任を負う覚悟を表明し、「その達成のため部下指揮官と隊員各個に向けて要望事項を示す」ものである。内部向けのものではあるが、広報紙などを通じて隊員家族や協力団体、更には関係地方公共団体にも伝わるものである。



藤岡駐屯地司令

師団長はこの日は長居することなく離隊する。目白押しに続く部隊の行事を妨げまいとする配慮である。

続いて幹部挨拶が実施される。副連隊長から始まり連隊幕僚、隷下各中隊長と中隊付き幹部が隷下部隊幹部の申告として、そして多くの場合業務隊等駐屯各部隊指揮官も挨拶を行うことが多い。挨拶は連隊長の前に進んで職名階級姓名を申告する形で行われる。これが終わると連隊長は状況報告を

受ける。昔日の報告は連隊長室で行われた場合もあったが当今は隊区地図が展開され、且つコンピュータと映像装置を定置してある作戦室が使用される場合も多い。災害派遣応急出動態勢の報告、或いは連隊が現在指定されている国際緊急援助隊の準備態勢等は重点報告事項であらう。

引き続き隊内巡視では各中隊長等が担任隊舎入り口で出迎える態勢を取っている。駐屯地司令として大事な仕事が増えている。部外関係先への挨拶回りである。大分県知事、県警本部長、消防本部長や国の出先機関、別府市長、大分市長、担当区域の市町村長への挨拶回



ヘリボーン訓練

りは特に大切である。当今、国民保護等の派遣や災害派遣について緊密な関係を保持しているためであるが、多忙な挨拶先を考えると日時設定は駐屯地側の都合で決められるのではなく、広報担当者の大いに苦勞する所であろう。

協力団体等関係者への着任挨拶も欠かすことは出来ない。協力者には個人として部隊に対して長い間、時間や私財を投じて支援を続けて下さっている方もおいでで、先ず今までのご協力に對して心からの感謝の態度を表すことは駐屯地司令が地域との交流で心掛けなければならない重要事項である。

その他、着任後早い時期に連隊幹部に対する精神教育を実施するのが通例である。連隊の幹部に対する精神教育は明示の規定は見あたらないが、連隊長の責任として全ての連隊で守られている伝統である。この教育如何によって部下、特に青年幹部が使命に邁進するか、修養を積んで将来雄飛するかが懸かっている。陸軍時代に聯隊の將校団でもあった伝統であろう。

連隊の海外派遣は第3次東チモール派遣施設群、第17次ゴラン高原派遣輸送隊、第7次イラク人道復興支援隊などに実績があるが、東チモールは郷土部隊の歩兵第47聯隊が軍旗を奉焼した土地である。故郷の人々の分も心も込

めた祈りが捧げられたのではあるまいか。

別府駐屯地業務隊

西部方面總監に直屬して岡崎康雄2佐が指揮し、駐屯部隊及び大分分屯地の総務、管理、補給、厚生、衛生業務を担当する部隊である。

第4後方支援連隊第2整備大隊

山岡貞二1尉の指揮のもと福岡駐屯地に所在する第4師團直屬第4後方支援連隊の隷下部隊であり、第41普通科連隊の整備支援を行う部隊である。

第404会計隊

後藤勇3佐の指揮下、駐屯地各部隊及び分屯地の隊員給与・旅費業務、部隊の調達・契約・支払い業務を担当する部隊である。

第304基地通信中隊別府派遣隊

山本康2尉が指揮し駐屯地の通信回線及び端末通信所・交換所を維持・運営する部隊である。

駐屯地司令表敬

部隊着任の印象を問うと「つくづく精強な部隊に赴任する事が出来たものだと感じています」と返答があった。

その言葉に誇張はないであろう。なにしろ連隊は平成20年度には国民体育大会銃剣道競技男子の部において大分県チームの主体となつて優勝、全日本官公庁剣道連盟創立40周年記念剣道大会

および全国自衛隊剣道大会において別府駐屯地Aチームとして出場して優勝している。特に全国官公庁剣道大会は、警視庁他の名の知れた強豪チームが出場するので、記念大会に優勝したことは実に賞賛に値する。自衛隊に優勝をさらわれた警視庁始め各府県警察は悔しさで歯ぎしりしたことであろう。駐屯地にはこの三つの成果を記念して立派な記念碑が建立された。後に紹介するが熱烈な支援者が中心となつて建てた碑である。



藤岡司令(左)にインタビュー中の筆者

ついで「なにを要する事項とされましたか」、配布された「着任の辞」を見せて頂けた。隊員に対し職場への誇りをもって同時に自信をもって職務を遂行

するため実力を身につけて欲しいとの想いを込めて「胸を張れ」と要望している。その実現には「所志勤行目的・目標の達成にむけて誠実に行動せよ」、「百練自得 不漸の錬磨に努め体得せよ」、「家族敬愛 家族に感謝し大切にせよ」と述べ、平素から家族を大切にすることで有時の際の覚悟を自覚せよと呼びかけている。

途中司令は話を中断し机の引き出しからシステム手帳を取り出し、挟まっていた紙を見せて頂いた。何と偕行社山本会長が幹部候補生学校卒業式で述べられた祝辞の文章であった。偕行社を代表した会長の祝辞は「日本とは何か」と、先人の三つの歴史的偉業として日露戦争、大東亜戦争、戦後の驚異的発展の国際史的意義を説き、この名誉ある国を守る矜持を胸に、自衛隊創立以来の困難を越えて一歩一歩今日を打ち立てた先輩たちの栄光を継げと激励されていたと記憶する。初任幹部への祝辞で述べられた願いが、連隊長クラスの現職にも座右の銘として大切に手帳に収められていることは、役員に報告すべきことと嬉しくなった。

史料館見学

表敬の後、史料館拝観に廻った。恐縮することに司令も同行下さったのである。「私も見たいので……」謹んでご配慮を頂く事にした。道筋には作業

中の隊員方が休憩中で、広報班長の「連隊長通ります」の声に瞬間的に起立し不動の姿勢を取って拳手をしていった。

史料館は旧第11教育大隊の教場を隊員方の手作りで改装されたものである。展示室は3つあり終戦前の資料展示が2室、自衛隊時代の資料が1室あった。室内にはやはり厳肅な雰囲気があり自然と姿勢を正した。展示ケースの下に空色の折りたたみ式の容器で「搬出箱」と墨書されているのが目を引いた。まさかの場合、真っ先に展示物を避難させる日頃からの準備で、大切にされていることが伺えた。

歴代連隊長のもと日本一の部隊を目指して……平成二十年度……輝かしい成果を収めた

第六十三回国民体育大会銃剣道男子の部に初優勝……全日本官公庁剣道連盟創立四十周年記念剣道大会及び第三十四回全自衛隊剣道大会において……見事優勝を成し遂げた……私共……は……この功績を石碑にとどめ……連隊の更なる錬磨を願うものである

代表して 杵築市 藤本久見
ある協力者

別府市民に親しまれていると云う『今日新聞』の切り抜きが何枚も廊下に張り出してあった。好意に充ちた隊員個人紹介記事である。この新聞社社長がおもしろい経歴を持っていた。小倉第40普通科連隊出身の檀上陽一氏である。若い頃親が経営する新聞社で部隊のレンジャー訓練を取材した折り、「想定訓練について行きたい」と申し出たところ教官は断った「君には無理だ」「レンジャー想定訓練は段階的に訓練を積んだ者でなければ死に繋がり

搬出箱

史料館からの帰途高台から見える石碑があった。前述の武道勝利の記念碑である。実物を間近にみるとその大きさ、石材の質の見事さ、形状の立派さに支援頂いた方々の並々ならない協力が実感できるのである。

碑文

歴代連隊長のもと日本一の部隊を
目指して……平成二十年度……輝かしい
成果を収めた

第六十三回国民体育大会銃剣道男子
の部に初優勝……全日本官公庁剣道連
盟創立四十周年記念剣道大会及び第三
十四回全自衛隊剣道大会において……
見事優勝を成し遂げた……私共……
は……この功績を石碑にとどめ……連
隊の更なる錬磨を願うものである

代表して 杵築市 藤本久見
ある協力者

別府市民に親しまれていると云う『今日新聞』の切り抜きが何枚も廊下に張り出してあった。好意に充ちた隊員個人紹介記事である。この新聞社社長がおもしろい経歴を持っていた。小倉第40普通科連隊出身の檀上陽一氏である。若い頃親が経営する新聞社で部隊のレンジャー訓練を取材した折り、「想定訓練について行きたい」と申し出たところ教官は断った「君には無理だ」「レンジャー想定訓練は段階的に訓練を積んだ者でなければ死に繋がり

かねない。ところが檀上氏は同行取材を敢行したのち「組織学」研究を兼ねて「入隊してみたい」と奮起。一任期を勤め上げた後、記者として新聞社経営者として活躍し、現在50余歳の自衛隊が好きで堪らない協力者なのだそうである。

取材後の寄り道

取材を終え広報班長に車でホテルに送って頂く途中で勿体ない申し出を頂いた。「明日時間があるようですので車でご案内をします」。瞬間返答に詰まった。筆者の幹部候補生学校時代の区隊長は大分出身の秦政美氏陸自57で、取材に先立ち県の見所について電話でお尋ねし、訪れてみたい所もあった。だが滝廉太郎氏の荒城の月の豊後竹田市の城跡も、湯煙の温泉も、高崎山の猿も、部隊に車を出して頂いて訪れるのは憚られる。幸い筆者には階行社会員として訪れて見たいところがあったので足が必要であり、本町に有り難く好意を頂くことにした。

翌朝9時ホテルに迎えを頂いた。広報班の石淵曹長である。「廃兵院」の歴史を尋ねたく別府病院をお訪ねした。明治期に設立された戦傷者を収容する施設であり全国にあったと記録されている。廃兵院規則をネットで引くと戦傷を国家の責任としていたことが分かる。だが名付け方が悪い。この施設発祥のフランス語の Invalides は確かに辞典では廃兵院とある。しかしそのまま言葉を使った無神経を思う。若い父母が「息子は廃兵院に収容されています」と答える時の切なさに配慮が至らなかつたのか。江戸時代でさえ「養生所」という名前があったではないか。その名前ゆえに地方ではその精神が理解されず役人が収容者を恥として収容力を下回る入所者しか集まらなかつた。探し求める資料は無かつたが総務課長清末義光2佐、次いで病院長里澤洋一1佐から海外派遣や災害派遣における組織的医療活動について現在までの実績や秋の国民保護活動の県・市との合同演習の予定について伺えた。有り難いことであつた。

「想定訓練について行きたい」と申し出たところ教官は断った「君には無理だ」「レンジャー想定訓練は段階的に訓練を積んだ者でなければ死に繋がり



大分陸軍墓地



第47聯隊軍旗の碑

ついで大分市桜ヶ丘聖地に陸軍墓地を訪ねて拝礼した。「手入れは行き届いていないと思いますが……」と言われたがその懸念は必要なかった。墓標の一つ一つが草に埋まることなく時の流れと折々の奉仕を語っていた。

最後に大分護国神社に参拝した。拝殿に至る参道の途中に駐車場があり、その手前に三つの碑が並んでいた。大分市内から別府湾を越えて杵築市まで見通せる高台に10mを越す忠魂碑の右に歩兵第47聯隊軍旗の碑、左手に佐伯海軍航空隊の碑があった。碑に向かい作法に則り参拝したが、続いて石淵曹長が拝礼する時の背筋の伸びた後ろ姿に、制服現役自衛官の凛々しさを感

了。拝殿に進み参拝の後、右手にある史料館拝観を願いに行つた石淵曹長は「婦りに社務所にお寄り下さい」との宮司小野日隆氏からの伝言を携えてきた。宮司は偕行社についてもご承知で40分ほどお話を伺った。紙致が無いことが恨めしい。なかで傑作なエピソードがあった。元々忠魂碑の周りには何も建てさせないのが基本方針であった。いろいろの申し出を受けると、きりがなくなるからである。だが、歩兵第47聯隊軍旗の碑は寸法まで書き入れた設計図を携えて有志が余り強く言つて来るので先々代宮司が承知したが、出来上がったらず想の3倍もの大きさであったという。すぐ手の内が想

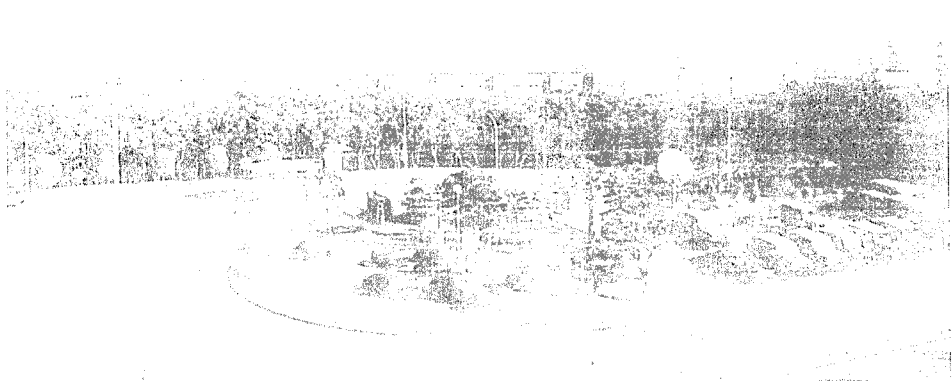


大分護国神社

像出来た。単位をセンチではなく、寸で表示したのではなかったか。宮司は「騙される方が悪い」と笑い飛ばしたそうである。宮司も戦前生まれの豪傑だったような気がした。

護国神社では、幾人かの奉仕の巫女、昇殿参拝を取り仕切る若い神職にも出会った。崇敬者の数も多いようでご同慶の至りであった。

今回、取材に応じて頂いた第1普通科連隊長兼ねて別府駐屯地司令藤岡登志樹1佐、用事処理中司令室までお運び頂いた副連隊長加来仁信2佐、広報班長小副川祐二3尉に心から御礼を申し上げた



別府市街と別府湾を望む駐屯地

い。また幹部候補生時代の区隊長秦政美氏から周辺の名所をご教示頂きながら無駄にしまった無礼についてもお詫び申し上げます。

文貞 松村興延陸自64